

水取入種管理設・湛水池の構築等多様な土木工事を経験した。

俘虜生活の間ベゴワードに移るまでは旧軍隊の編成ですべての行動をして何ら問題もなく過ごしたが、ベゴワードに移ってからは、二人の日本人が入って来て共産主義を説き、第二の祖国ソ連のため献身せよと、いつ帰国できるかもしれない不安の毎日を過ごしている同胞を追い立て、ダモイを餌に駆り立てていた。冷静に彼らの言動を観察すれば、ソ連政府の策謀による日本人の思想改革と苛酷なノルマの完遂による疲弊したソ連の復興の目的完遂のため、甘言に乗せられ躍らされている輩で、日和見主義者が多く、労働に従事することもなく、汗を流す同胞の上に胡坐して思想改革と苛酷な労働を強要、六十万余の日本人を苦しめた横暴は誰しも終生忘れ得ないであろう。

昭和二十三年十月末、大隊長と通訳外若干名と別れ、帰還のため貨車の上の人となり、十二月三日、帰還船遠州丸（復員二千三百人）により八年ぶりに日本の土を踏んだ。

入ソ時に申し合わせた全員無事帰国させる約束は、私よりも年長の者九〇パーセント。二十年八月四日召集の軍隊生活の経験も乏しい者ばかりがお互いに励まし助け合って過ごした結果、病死一人、作業中の事故死一人を出したが、他の者に過度の病人もなく全員帰国出来たのは幸いであった。

復員後五十一年、苦勞を共にした友も大半が他界され、私と行動を共にした者も十人足らずとなった。異国の地に眠る幾多の霊に想いをいたし筆をおきます。

シベリア抑留記

静岡県 佐藤 定 衛

私は、大正七年十月一日に生まれた。長男が幼かったので母が婿を取り家を継いだのであるが、私が生まれた頃に父が死んだので、母は私を祖母に預けて他村に嫁いでしまった。祖父はなく、私は祖母に育てられ

た。

(旧) 中大見村八幡尋常高等小学校高等科一年(十四歳、三月二十五日卒業式)の時に祖母が死に、もう駄目だと思い学校をやめ、それから奉公に出て色々やった。最後に製材業兼木箱屋(今はダンボール)。十七歳の時右手の薬指と小指を怪我したので徴兵検査で第二補充となり、半年後に第一補充兵名古屋野砲隊の十三として番号が来た。知人を頼りに上京、軍需工場中島飛行機株式会社に思いがけなく入社できた。飛行機のエンジン作業だった。

昭和十七年十二月三十日召集令状、昭和十八年一月十二日入隊、大雪だった。静岡県・愛知県・岐阜県・三重県の四県で三百人くらい召集の中から四十五人が北支行き。私達は冬服、後の人達は夏服、南方行き。

名古屋に十日いて二十二日出発。朝鮮を通り北京を通り、済南郊外の張店の野砲山砲の秋部隊二個中隊の独立部隊で、私達十五人は山砲隊に配属となる。

六カ月の教育を受けて秋部隊が解散となる。野砲隊は石部隊になり南方派遣、山砲隊は陣部隊二十四中隊

転属となり、門頭溝方面で移動中隊として討伐等の任務だった。

昭和十九年一月、北支方面軍幹部教育学校(見習士官一カ月、中隊長十五日、大隊長一週間)に、北支の各中隊から二年兵の一選抜の上等兵一人ずつ、教育員として盧溝橋近くの一文山(橋から三百メートル)山上の学校に中隊長の命令を受け、一年六カ月いて本隊に復帰命令。本隊は二月頃に満州に行っていた。奉天(現在の瀋陽)市内通遼飛行場跡に駐屯中の本隊に復帰、飛行機もなく模様が並ぶ幕舎生活だった。

昭和二十年八月の第二(金曜日、十日頃と記憶する)が、出発命令で午後六時までに全員貨車に乗り、場所も判らない所で砲、馬、弾薬を下ろす。壕を掘って戦闘準備完了。されど終戦連絡も取れぬまま、話だけで砲、弾薬を山に埋める。食糧、衣服を持てるだけ持つて当てもなく行軍し、山中でテント生活に入る。一週間後、ソ連の飛行機が発見され奉天集結となる。部隊は解散せず、武装解除だけはソ連軍の命だった。

満州には、日本軍が十年間分は食糧があると言うよ

うに、カマスを二ツ折りして掛けて粟、黍、高粱、燕麥、梅、岩塩など点々とあった。ソ連軍の命によりそれらを奉天駅前に集める。私達に付いたソ連軍はおとなしく、疑うこともなかった。

一週間くらい奉天にいて貨車に乗せられた。腰掛けないのでカンパンの箱を入れ腰掛けにした。たしかハルビンあたりだと思ふ、日本人の引揚者達が二日、三日も何も食べていないと言うのでカンパンを分けてやったと思う。部隊長が、ウラジオを通り日本に帰してくれると言うのに安心していた。ソ連軍は貨車の前後に居るだけで、わりに良かった。私達は武装解除だが将校だけは軍刀を持っていた。どこに降りてもまた貨車の中、降りるのは大小便だけだ。

何日かわからずチタから百キロ余り北東のブカチャに到着。小さな炭坑町は囚人ばかりが暮らす刑務所らしく、建棟は幾つもあつたが有刺鉄線張りで四隅の望楼から監視されていた。仕事は炭坑と工場の鍛冶屋。炭坑は一炭坑から七炭坑まであり、私は一炭坑に入った。八時間毎の一番、二番、三番（一番八時から

四時まで、二番四時から十二時まで、三番十二時から朝八時まで）を一週間毎に交替、私は班長として部下九人を連れて作業に従事した。

食事は飯盒に粟、黍、高粱、燕麥の重湯だ。半年ぐらい後に食堂が出来て食券が渡りやや改善されたが、ノルマで量が左右されるのには変わりない。仕事を終えると現場監督が事務所に来て、紙片にその日の仕事量を一人一人記入して、監視兵が収容所に持っていくという仕組みであるが、事務の整理上、今日の仕事量は一週間後だ。ノルマによって一人一人別だが、七〇パーセントから八〇パーセントの記入しかなされていなかった。当初所長が「日本人は仕事をしない」と言った理由が判った。現場監督が頭をはねていたのだ。

片言が話せるようになって、事務所で「今日はトロッコに何台入れれば一〇〇パーセント達成にしてくれ」と交渉し、一〇〇パーセント達成。しかし食は少なく仕事は辛く、足に石炭を幾度落としたかしれない。落盤したと言ひ足を引きずって医務室に行く。

二、三日休養してはまた仕事の繰り返しであった。死か怪我をしなければ日本に帰れると言われた。風呂は月に二回、シャワーと蒸し風呂だ。南京虫と虱には悩まされた。

寒さは朝夕の点呼と炭坑への往復で、帰りには持てるだけ石炭を持って来るので、室の中は日夜燃やしていて寒さはない。寒さと言うまでもなく、土を見るのは僅か三、四カ月。九月から三月、四月頃まで零下四〇度前後の毎日。寒さと重労働、栄養失調で日に三人、五人と斃れ、夕食終えて朝になってみれば寝たきりで死んでいる人もいた。松林に三十人、五十人と穴掘り要員を出す、凍土はツルヘシも寄せ付けず、枯れ枝を集め燃やして掘る。一人用の穴に四、五日はかかる。十日後に自分の掘った穴に入る人もいる。第一収容所千二百人中五百人強が死亡、第二収容所二千人中八百五、六十人が他界。落盤による死者は少なく、五十六人だ。ほとんどが栄養失調だった。私は坑内ガスで心臓をやられて地上に出て、大工の経験があったので鍛冶屋のハンマーの柄を作る作業をやる。片手ハ

ンマー一日三十本、前打ちは一日十五本作る。松木なので一日に三日分も作れ、楽しかった。

帰る半年前に足はむくみ体は瘦せ病院に入る。収容所の中は二、三十人で、休養のため、治ればまた作業だ。午前と午後に所長と日本軍医が見に来る。毎日何とかしてくれと言ったためか、患者の炊事作業に入ってもらった。三人だった。自分で炊事をするので食に不自由はない、一命を永らえた。

昭和二十一年暮れにスターリン大統領から、ソ連に早く来た収容者、また重労働、共産党に反対の収容者は帰れと通報があり、私達収容者は九月入所、重労働、共産党、三つが当てはまり帰国命令があった。

昭和二十二年春、四月初め頃と思う、ナホトカ着。朝夕、日本共産党が赤旗振り、歌を歌わされた。十日ぐらいいて待ちに待った帰還船信洋丸が来た。ソ連抑留も終わったかと思ひ胸を撫で下ろした。乗船、出航。

舞鶴港上陸は四月中旬頃と思う。帰還船内での船員達はとても良かった。それにしても、なぜソ連はもっ

と乗船させなかつたかと思う。私達五百人ぐらいた。
千人は乗船できたと言う。

昭和二十二年四月二十日に上陸。ソ連の汚れた服
だったので旧海軍の新服をもらった。舞鶴ではタバコ
がバラで二十本、金三百円、家までの汽車の切符、電
報は何本打つてもよかつた。

一週間ぐらい舞鶴にいて臨時列車で出発、四月三十
日か五月一日頃と思う。京都から汽車で五十分ぐらい
手前の園部駅。家の窓から日の丸を振って、ホームで
は婦人会の人たちが水筒にお茶を入れていて、男女青
年団がツツジ、菜の花の束を皆にさしてくれ、子供は
新聞をくれ、その後青年団が「赤とんぼ」の歌を歌つ
てくれた。感無量だった。良き思い出になった。

京都に四時着、ここで各方面行き列車に分かれ
て、そして八時出発。家に着いたのは五月三日夜だつ
た。

栄養失調で三島市国立病院に通い、八月に結婚。男
子一人女子二人授かり、孫も出来、今は曾孫もいる。

昭和二十二年、近所に郵便局があつたので十月二十

五日入局、昭和五十一年三月退職。

私の人生は長かつた。今八十二歳になろうとしてい
る。

抑留記

滋賀県 白井末一

私は、昭和十八年二月一日、現役兵として熊本野
砲兵第六連隊補充隊に入隊した。そこで二カ月間の基
礎教育の後渡満し、三江省富錦県富錦の第七独立守備
砲兵隊に転属した。

第一期の初年兵教育終了後に幹部候補生を志願し、
選抜試験を経て念願の甲種幹部候補生を命ぜられて、
昭和十九年一月二十日、豊橋陸軍第一予備士官学校に
入校した。

八月十四日同校を卒業し、晴れて見習士官を命ぜら
れ、再び原隊復帰し富錦へ帰り着いてみれば、第七独
立守備砲兵隊は富錦駐屯砲兵隊に改編増強されてい